

川久保B遺跡

福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第59集

2011

春日市教育委員会

川久保B遺跡

福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第59集

2011

春日市教育委員会

序

本市の北部から中央部にかけての一帯には、奴国の王都であったと推定される須玖遺跡群が所在しています。一方、福岡市と那珂川町に隣接する市域の西部には、弥生時代の著名な遺跡も点在していますが、前方後円墳が多数存在しており、文化財の内容が北部や中央部とはやや異なった様相を示しています。

ここに報告します川久保B遺跡は、市域の西部に位置する弥生時代から歴史時代の複合遺跡で、人々がこの地を長期にわたって生活の場としていたことが発掘調査によって明らかとなりました。宅地化が進行し、埋蔵文化財の発掘調査が頻発している本市において、当地周辺は比較的の調査例が少なく、遺跡の状況をあまり把握できておりらず、今回の調査はその意味においても貴重な成果といえます。

本書が歴史の研究資料として末永く利用され、また、一般の方々にも広く活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査や整理作業に当たりまして、御指導、御協力を賜りました多くの方々に深甚の謝意を表します。

平成23年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

例　言

- 1 . 本書は、平成11年度に春日市教育委員会が実施した共同住宅建設に伴う川久保B遺跡緊急発掘調査の報告書である。
- 2 . 遺構の実測は、平田定幸、井上義也が行い、製図は伊東ひかりが担当した。
- 3 . 遺物の図面作成及び製図は、平田、井上、牧野幸子、齊藤礼、吉富千春、池田紀子、福田幸子が行った。
- 4 . 掲載した写真のうち、遺構については平田が撮影し、遺物は文化財写真工房（岡紀久夫）に撮影を委託した。
- 5 . 本書に使用した2万5千分の1地形図は、平成17年に国土地理院が発行した『福岡南部』である。
- 6 . 本書の遺構実測図に用いた方位は磁北である。
- 7 . 本書の執筆は平田、井上、牧野が担当し、編集は平田が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1. 調査に至る経過	1	
2. 調査の組織	1	
II	位置と環境	2
III	調査の内容	7
1. 調査の概要	7	
2. 遺構と遺物	8	
(1) 竪穴住居跡	8	
(2) 掘立柱建物跡	12	
(3) 土坑	19	
(4) ピット	23	
(5) 包含層	25	
IV	まとめ	28

図版目次

図版 1	川久保B遺跡周辺航空写真（南東から）
図版 2	川久保B遺跡周辺航空写真（北西から）
図版 3 (1)	川久保B遺跡全景（東から）
(2)	1号竪穴住居跡（西から）
図版 4 (1)	2号竪穴住居跡（東から）
(2)	3号竪穴住居跡（北から）
図版 5 (1)	4号竪穴住居跡（北から）
(2)	4号竪穴住居跡（東から）
図版 6	4号竪穴住居跡土器出土状態
図版 7 (1)	1・2号掘立柱建物跡（西から）
(2)	4・6号掘立柱建物跡（北から）

- 図 版 8 (1) 5号掘立柱建物跡(北から)
 (2) 1号土坑(東から)
 (3) 1号土坑土器出土状態
- 図 版 9 (1) 2・3号土坑(東から)
 (2) 4号土坑(南から)
- 図 版 10 (1) 5号土坑(東から)
 (2) 6号土坑(東から)
- 図 版 11 (1) 7号土坑(西から)
 (2) 7号土坑土器出土状態
- 図 版 12 (1) 1号竪穴住居跡出土土器
 (2) 2号竪穴住居跡出土土器
 (3) 3号竪穴住居跡出土土器
- 図 版 13 4号竪穴住居跡出土土器①
- 図 版 14 (1) 4号竪穴住居跡出土土器②
 (2) 掘立柱建物跡出土土器
- 図 版 15 (1) 1・7号土坑出土土器
 (2) 2・4号土坑出土土器
- 図 版 16 (1) ピット・包含層出土土器
 (2) 4号竪穴住居跡出土鉄器
 (3) 4号土坑出土鶴羽口
- 図 版 17 (1) 1・4号竪穴住居跡出土石器
 (2) ピット・包含層出土石器

挿 図 目 次

第1図 川久保B遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図 川久保B遺跡位置図	4
第3図 川久保B遺跡遺構配置図	5
第4図 1号竪穴住居跡実測図	9
第5図 1号竪穴住居跡出土土器実測図	9
第6図 1・4号竪穴住居跡出土石器実測図	10
第7図 2号竪穴住居跡実測図	11
第8図 2号竪穴住居跡出土土器実測図	11
第9図 3号竪穴住居跡実測図	12

第10図	3号竪穴住居跡出土土器実測図	12
第11図	4号竪穴住居跡実測図	13
第12図	4号竪穴住居跡出土土器実測図①	14
第13図	4号竪穴住居跡出土土器実測図②	15
第14図	4号竪穴住居跡出土鉄器実測図	15
第15図	1・2号掘立柱建物跡実測図	16
第16図	3・4号掘立柱建物跡実測図	17
第17図	5・6号掘立柱建物跡実測図	18
第18図	掘立柱建物跡出土土器実測図	19
第19図	1・2号土坑実測図	20
第20図	1・7号土坑出土土器実測図	21
第21図	2・4号土坑出土土器実測図	21
第22図	3・4号土坑実測図	22
第23図	4号土坑出土鰐羽口実測図	23
第24図	5・6号土坑実測図	24
第25図	7号土坑実測図	25
第26図	ピット・包含層出土土器実測図	25
第27図	ピット・包含層出土石器実測図	25

表 目 次

土器観察表	26
-------	----

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成11年3月2日に建設会社をとおして当該地の地権者から共同住宅建設設計画に係る文化財事前調査依頼書が文化財課に提出された。開発面積が約1300m²と広く、現地を確認すると南北にのびた低平な台地の東斜面に位置しており、地形的にも遺跡が存在する可能性が窺われたため、試掘調査を実施することとなった。

現地が更地となって間もない平成11年6月10日に試掘調査を実施したところ、60~70cmの厚さの客土下に部分的に遺物包含層が認められ、その下部には対象地の西半部を中心にピットや土坑などの遺構が検出されたことから遺跡の所在が明らかとなった。

その後、地権者及び建設会社と遺跡の保存を協議したが、当初から鉄筋コンクリート造の建物が計画されていたため遺跡の破壊は避け難い状況となり、急速発掘調査に至る結果となった。本調査は、建築着手予定期を考慮し、平成11年8月2日から受託事業として開始することで地権者の同意を得た。

本調査の対象としたのは、開発地のうち遺構の保存に影響が考慮される395m²で、予定どおり調査を開始し、約2ヶ月後の平成11年10月4日に終了した。

なお、遺物の整理作業及び報告書作成は、平成22年度を中心に行つた。

2. 調査の組織

発掘調査及び報告書作成時の体制は以下のとおりである。

発掘調査(平成11年度)		報告書作成(平成22年度)	
教育長	河鍋 好一	教育長	山本 直俊
教育部長	柴田 利行(~12月)	社会教育部長	古賀 俊光
	岡本 嘉彦(1月~)		
文化財課長	井上 武美	文化財課長	西尾 純司
管理担当		管理担当	
課長補佐兼係長	桑野 浩行	係 長	居石 正明
主 査	増永 瞳司	主 査	福間 義彦
主 査	北島 公則	主 事	山田ひとみ
主 任	十時 弘之	主 事	佐伯 廣宣(7月~)
嘱 託	池田 正大	文化財担当	
文化財担当		課長補佐兼係長	平田 定幸
係 長	丸山 康晴	主 査	中村 昇平
主 査	平田 定幸	主 査	吉田 佳広
主 任	中村 昇平	主 任	井上 義也
主 任	吉田 佳広	嘱 託	牧野 幸子
主 任	森井千賀子	嘱 託	柳 智子
主 任	境 靖紀	嘱 託	松田 千恵(~6月)
嘱 託	井上 義也	嘱 託	上原 あい(7月~)

II 位置と環境

川久保B遺跡は、春日市下白水北1丁目143番2外に所在する。

当遺跡は、脊振山系の北東部を源とし、福岡平野の西半部を北流する那珂川の右岸に形成された中位段丘上に立地する。当段丘は福岡市と春日市との市境付近に当たり、この一帯では両市の遺跡分布図が錯綜する。

川久保B遺跡が立地する段丘の北部には、弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構が集中する御陵遺跡が所在し、この遺跡より北方は地形的に一段低くなっている平野南部に没している。御陵遺跡はまだ調査地点・面積が少なく、遺跡の全容が把握できていないが、青銅器鋳型などの鋳造関連資料が集中的に出土しており、東側に近接する須玖遺跡群との強い連関が想定される。

また、御陵遺跡の西側に隣接する低地には笠抜遺跡が所在する。ここでは突堤文期の水路や弥生時代中期末から後期にかけての貯水遺構などの灌漑施設が発見されている。また、銅矛中型がまとまって出土しており、この近辺において青銅器生産が行われていたことを示している。

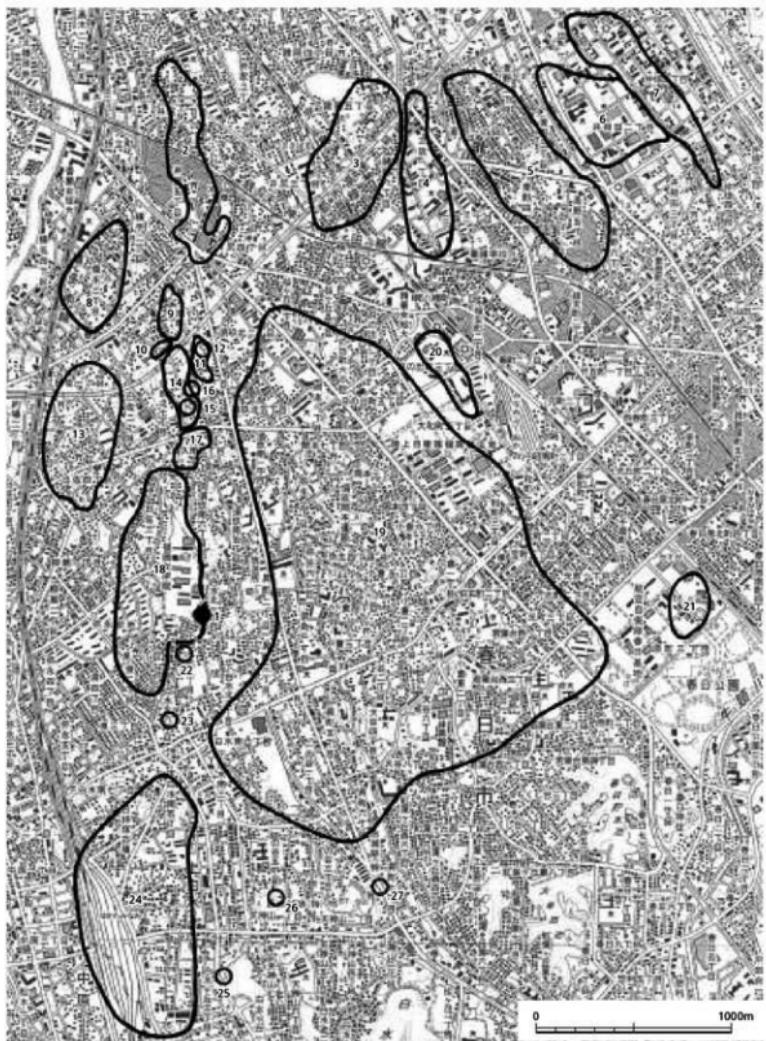
一方、川久保B遺跡と御陵遺跡との間には、野藤遺跡と浦田遺跡が所在する。この両遺跡とも発掘調査が進んでいないため、遺跡の詳細は不明と言わざるを得ないが、野藤遺跡の断片的な調査において青銅器鋳型が3点出土していることが特記される。

以上、見てきた各遺跡は、弥生時代から古墳時代前期の遺構が中心となっており、遺跡の性格が共通する部分が認められる。これらの遺跡は、ガラス勾玉鋳型や内行花文鏡が出土した福岡市の弥永原遺跡群や本遺跡とともに同一遺跡群として包括することができよう。

川久保B遺跡の周辺には、古墳時代の大規模な集落跡はまだ発見されていないが、前方後円墳が点在している。御陵遺跡の北端には初期の前方後円墳と推定されている全長30m前後の御陵古墳が所在する。また、川久保B遺跡の北方1.1kmの位置には、円筒埴輪が出土した全長47m前後と推定される野藤1号墳があり、その北東側に近接してこれよりやや規模が小さい野藤2号墳が築造されている。一方、川久保B遺跡の南方約250mには、全長47mほどの下白水大塚古墳が存在する。

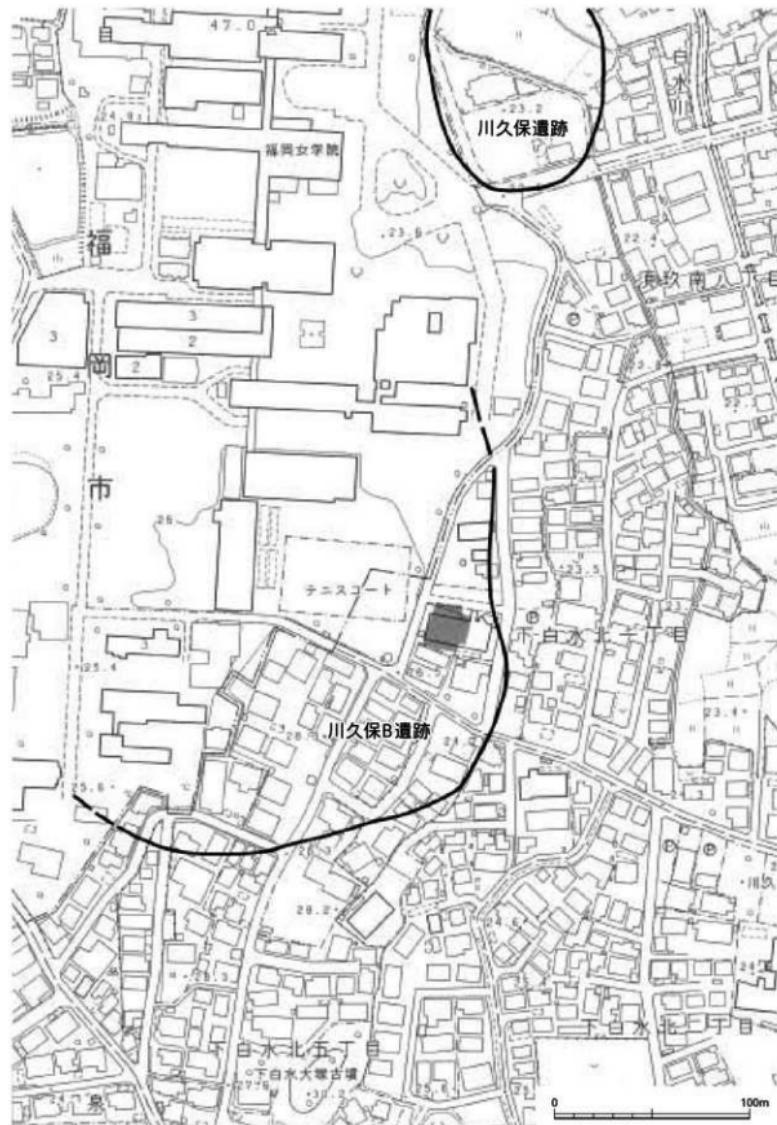
時代が下って16世紀代には川久保B遺跡の南西約500mの位置に天浦城があったと伝えられる。『筑前国続風土記』によると、天浦城は筑紫氏の家臣であった島鎮慶の居城とされるが、現在のところその正確な位置や規模等については明らかとはなっていない。

また、川久保B遺跡は旧下白水地区に含まれるが、白水という地名の由来とも推定されている「白水の井」と呼称されていた湧水が当遺跡の南方550mの位置にあったとされる。『筑前国続風土記拾遺』によれば、「此泉の末は渓川となり、田畑にそそぐ、旱年にも水涸ることなし」とあり、水が乏しい当地にあっては古来貴重な資源であったと考えられる。

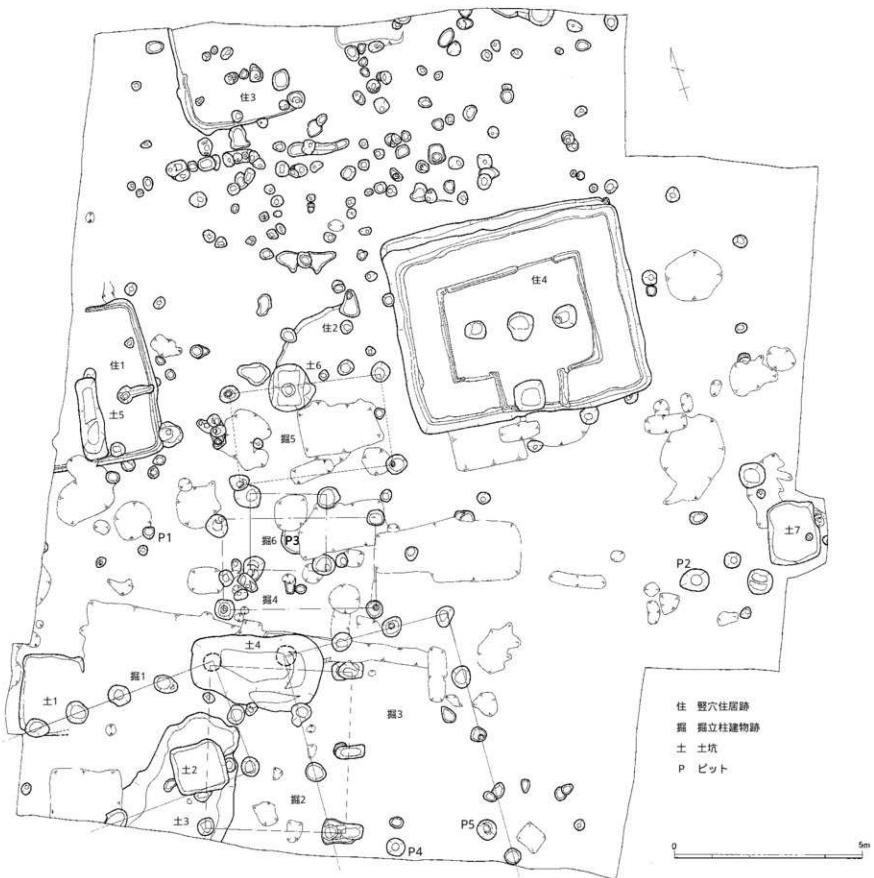


1 川久保 B 遺跡	2 井尻 B 遺跡	3 笹原遺跡	4 三鉄遺跡
5 姫野 A 遺跡	6 井相田遺跡	7 仲島遺跡	8 横手古墳
9 寺島遺跡	10 笠抜遺跡	11 御陵遺跡	12 御陵古墳
13 日佐遺跡	14 野藤遺跡	15 野藤 1 号墳	16 野藤 2 号墳
17 清田遺跡	18 弥永原遺跡群	19 清秋遺跡群	20 下大荒遺跡
21 駒河 A 遺跡	22 下白水大塚古墳	23 白水の井	24 上白水遺跡群
25 ウタグチ B 遺跡	26 天神山水城跡	27 大土留水城跡	

第1図 川久保 B 遺跡周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)



第2図 川久保B遺跡位置図 (1/2,500)



第3図 川久保B遺跡遺構配置図(1/100)

III 調査の内容

1. 調査の概要

発掘調査の対象としたのは、試掘調査によって遺構の存在が確認された開発予定地の西半部分である。平成11年8月2日から調査を開始し、まず、調査区の西部から重機で表土を除去しながら遺構検出作業を順次進めて行った。当地一帯は宅地化が早く、調査対象地は周辺の宅地造成時に整地が施されており、東部へと厚い客土が存在した。発掘調査に当たり、客土及びその下部に堆積していた耕作土を重機によって除去すると、黄褐色粘土層に掘り込まれた遺構が確認できた。遺構の残存状態は、斜面の上位に当たる調査区西部では削平が著しく、擾乱坑も多数存在した。東部は宅地造成時に厚く客土が施されていたため、遺構の遺存は比較的良好であった。遺構検出面の標高は、調査区の西端付近が25m前後を測り、調査区東端ではこれより60cmほど低くなっている。斜面上位に当たる調査区西部の方が後世の削平が大きいことを勘案すると、東端との比高差は1m前後であったと推定され、本来の地形は現況より勾配がやや大きかったと思われる。

当該地は南北に長くのびた台地の東緩斜面に当たり、遺構は調査区全体に分布していたが、斜面下位に位置する調査区の東端はその密度が比較的薄くなっている。これより東側には殆ど遺構が存在しないものと判断される。調査で検出した遺構としては、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡6棟、土坑7基及び多数のピットがある。

竪穴住居跡は調査区の北半部に集中しており、弥生時代のものが1軒と古墳時代のものが3軒存在する。一方、掘立柱建物跡は竪穴住居跡とは対照的に調査区の南半部に集中する状況が認められた。

発掘調査で出土した遺物は整理箱11箱で、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器等があるが、遺構の内容からすると量はさほど多くはなく、まとまった遺物が出土したのは、4号竪穴住居跡のみであった。また、地形が東側へ緩やかに下り傾斜で、且つ南北両側へも低くなっていたため、調査区の東・北・南側縁辺には包含層が認められた。ただ、包含層は全体的に薄く、出土遺物の量は少ない。

出土した遺物からすると、本遺跡は弥生時代前期から8世紀までの遺構が混在しており、長期間にわたって生活が営まれた複合遺跡である。調査区内の遺構に関しては古墳時代の遺構が多く、出土遺物も該期のものが主体をなす。但し、周辺遺跡の内容を勘案すると、本遺跡の未調査域では弥生時代の遺構が主体を占めている可能性があろう。

平成11年10月4日までに現場作業を終了し、直後に埋め戻し作業を実施して発掘調査を完了した。

2. 遺構と遺物

(1) 穴住居跡

1号穴住居跡(図版3~(2)、第4図)

調査区の西辺中央付近に位置する。当住居跡の西半部は調査区外にあるため、全容は把握できていない。また、削平が著しいため遺構の遺存状態が悪く、調査時の壁高は10cm前後であった。方形の住居跡で、規模について確認できたのは東辺のみで4.16mを測る。北・南・東辺には、幅20cm前後の壁溝が巡る。5号土坑と重複しており、1号住居跡の方が古いことを確認している。床面には焼土が認められた。

当住居跡からは土器のほか砥石が出土している。

土 器(図版12-(1)、第5図) 1~4は土師器。1の小形壺は、頸部の括れが小さく鉢に近い形状をなす。口縁部は僅かに内湾気味に外傾して立ち上がる。2・3は甕で、口縁部はともにかすかに内湾する。2の口縁部は外傾して「く」の字状を呈するが、3は直立気味に立ち上がる。2はくびれから胴部へは、なで肩となっているが、3はやや肩が張り、胴部の最大幅はほぼ中位にある。4の高坏は脚部を欠く。坏底部は水平で、体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。5は弥生時代中期の甕の底部で、明らかに混入した資料である。

石 器(図版17-(1)、第6図) 長さ14.8cm、幅9.8cm、厚さ3.5cmを測る板状の砥石。極めて緻密な石材が用いられており、A面に著しい使用の痕跡が認められるほか、他の3面にもわずかながら研磨の痕跡を残す。暗緑灰色を呈する粘板岩製。

2号穴住居跡(図版4-(1)、第7図)

調査区の中央部に位置する住居跡で、遺存状態が悪く、残存するのは一部のみである。壁は北部のみが残存しており、その形状から円形プランと判断される。壁高は最も高い部位で3~4cm程度と大きく削平を受けている。床面については残存する範囲が不明瞭で、明確に検出することができなかつた。

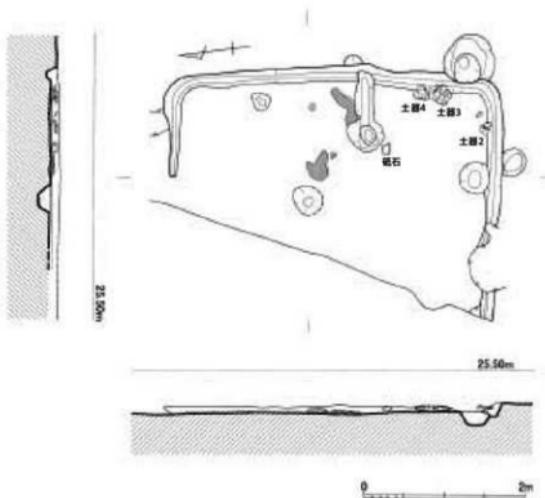
出土遺物は少なく、弥生前期の土器2片のみである。

土 器(図版12-(2)、第8図) 1は甕の口縁部片で、口縁部は緩く外反する。口縁外端に刻み目が施されている。2は壺の底部であろう。外面にはかすかにヘラミガキの痕跡が残っている。1・2とも床面から出土した弥生時代前期の土器で、小片ではあるが住居跡の年代を示す資料と考えられる。

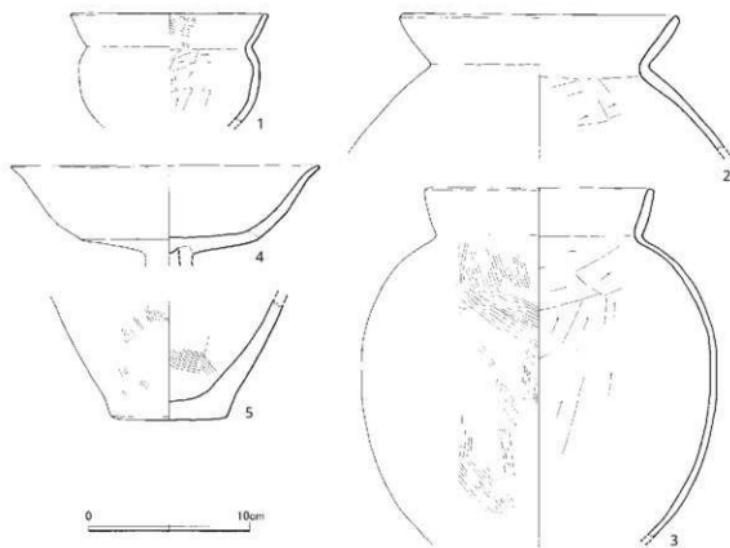
3号穴住居跡(図版4-(2)、第9図)

調査区の北部に検出した方形の住居跡。遺存状態が悪く、且つ北部が調査区外であることから正確な規模を把握できていない。南西隅部周辺に壁溝が掘られている。床面に検出したピットの深さは、42cmのP1を除いたほかは5~25cmと浅い。

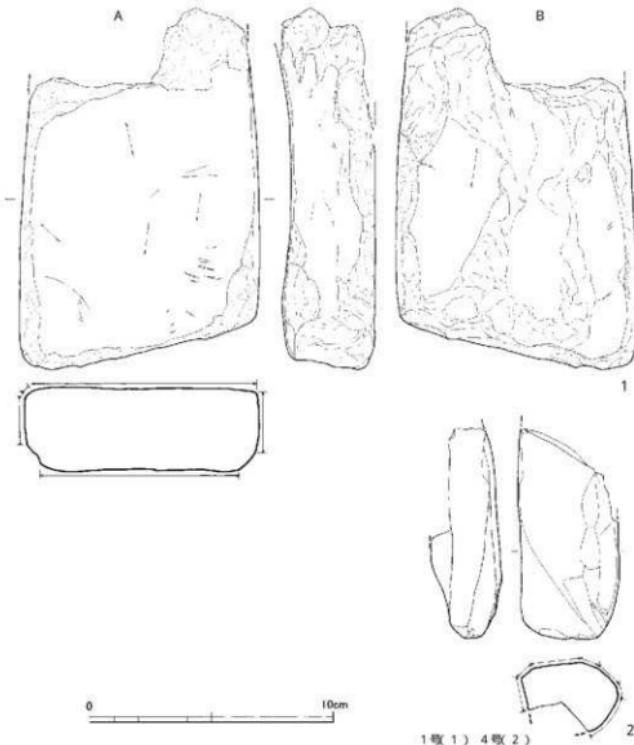
甕、高坏等の土師器が出土した。



第4図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)



第5図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

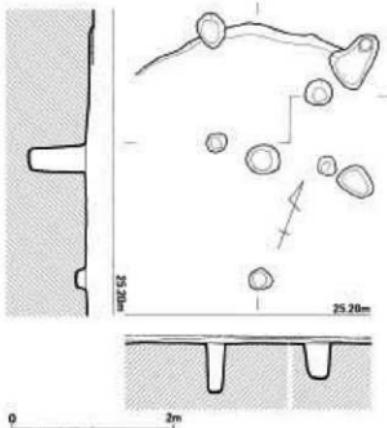


第6図 1・4号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

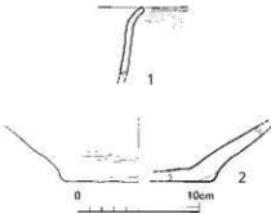
土 器(図版12-(3)、第10図) 1は小型丸底壺の破片資料で、くびれ部から口縁部へはや内湾する。口縁端部と底部を欠く。2・3は甌。2は口縁部の小片で、薄手のつくりである。口縁部はほぼ直線的にのびて、端部は両角状に肥厚する。3は胴部の上位はヘラ削りによって薄く仕上げられているが、口縁部は比較的厚い。くびれ部から口縁部へは外反気味にのびた後、端部付近でわずかに内湾する。4~6は高壺。4・5はともに脚部を欠く。两者とも壺底内面は平面をなし、外面の底部と体部との境は棱が巡る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。6は脚部で、外方へ屈曲して開く。7は手捏ね様の小形品。底部は平底状で、体部から口縁部へはほぼ直線的にのびる。

4号竪穴住居跡(図版5-(1)・(2)・6、第11図)

調査区中央部からやや北東寄りの位置に検出した住居跡。北壁は二重に掘り込まれた状況が確認された。外側を掘り込んだ後、黄褐色粘質土で埋め戻して20~30cm内側に再度北壁をつくり出していた。



第7図 2号竖穴住居跡実測図(1/60)



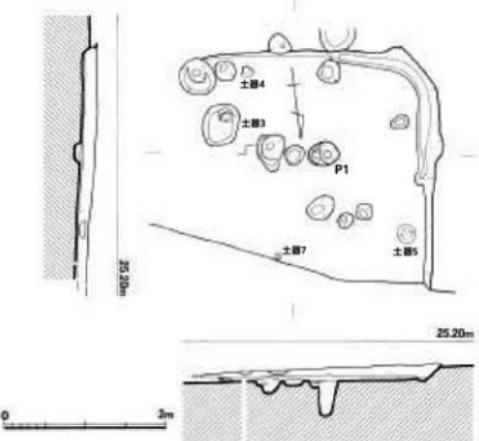
第8図 2号竖穴住居跡出土
土器実測図(1/4)

つまり、何らかの理由で規模の縮小が行われたものと考えられる。これによって住居の規模は東西長が6.35m、南北長が4.95mの長方形となっている。屋内の周囲には南辺中央部を除き幅80~90cm前後のベッド状遺構が存在する。ベッド状遺構が途切れた南辺中央部には80cm×80cmの隅丸方形を呈した深さ23cm

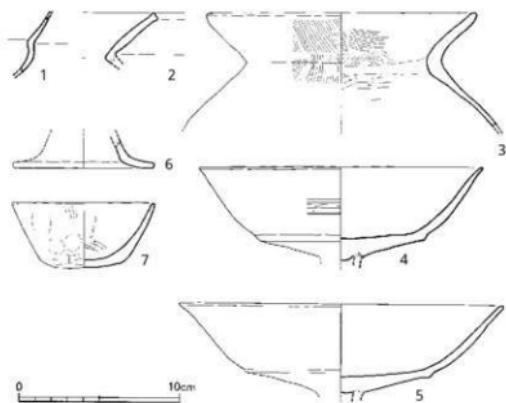
の土坑が掘り込まれていた。壁際及びベッド状遺構の内壁下には一部を除いて小溝が掘られている。主柱穴は屋内床面に検出したP1及びP2で、深さは40cm程度である。P1では径15cmの柱痕跡を検出した。主柱穴間に存在する深さ12cmの浅いビット内には一部焼痕が確認され、炉跡と考えられる。

当住居跡からは古式土師器がまとめて出土した。また、弥生土器も若干出土しているが、すべて小片であり混入品である。このほか、砥石が1点出土している。

土 器 (図版13・14-(1)、第12・13図) 1は壺の口縁部付近の資料で、胎土は精製されている。くびれ部から口縁へは内湾して立ち上がる。鉢に近い形状となる可能性がある。2の壺は口縁部を欠く。薄手のつくりであるが、胎土にはわずかに粗砂粒を含む。3は1・2に比べると器肉がやや厚い。口縁部はやや短く、内湾気味に外傾して立ち上がる。4は小形の壺であろう。口縁部は外反して開く。5・6は二重口縁壺の破片資料。5は、頸部が直立する。7は二重口縁壺の口縁部資料。口縁部は外反し、厚手のつくりである。8は壺の頸部から肩部と思われるが、天地逆で高壺となる可能性も考えられる。9は壺の口縁部であろうか。頸部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部が屈曲して開く。口縁端部は上方へ鳥嘴状に突出する。10・11は広口壺。口縁部は逆「ハ」の字に大きく開く。11の内面には、1~2cm単位の粘土帯接合痕が明瞭に観察される。12は壺の胴部中央付近の資料である。内面はハケ目後へラケゼリ、外面はハケ目後へラミガキが施されている。13の壺はやや厚手のつくりで、口縁部が外反する。14は壺あるいは楕の口縁部。外面にはハケ目が残る。15は山陰系の二重口縁の楕。16・17は布留式系楕の口縁部で、内湾気味に立ち上がり、端部は角張る。19は精製胎土による鉢。楕状を呈し、内外面ともへラミガキで、薄手のつくりである。20~22は脚付鉢。20は小形品で、内面はハケ目、外面はへラミガキで仕上げられている。22は胎土に角閃石を含み、内面がへラミガキ、外面はハケ目による調整。全体的に粗雑なつくりである。23~28は弥生時代中期の土器で混入品である。



第9図 3号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第10図 3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

土遺物が極めて少なく、確実な時期を把握することができなかった。図示した土器はすべて小片であり、混入品の可能性が高い。

1号掘立柱建物跡 (図版7-(1)、第15図)

調査区の南西隅に検出した。一部が調査区外にのびているため、全体の規模を明らかにできていな

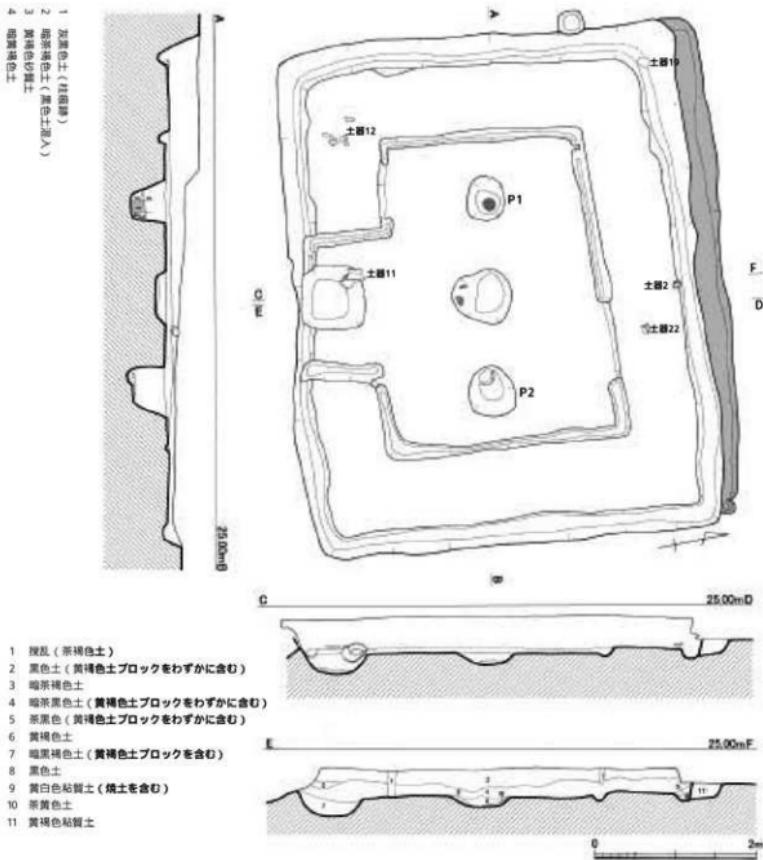
23・24は逆「L」字状を呈する櫛口縁部。25~28の底部は内面がナデ、外面はハケ目調整である。これらの混入品はその器形や調整の特徴から中期後半期に位置付けられる。

石 器 (図版17-(1)、第6図) 全長8.6cm、幅4.1cm、厚さ2.9cmを測る。緻密な粘板岩製で、ほぼ全面を砥石として使用している。

鉄 器 (図版16-(2)、第14図) 1は4号住居内攪乱から出土した鉄釘である。4号住居に伴わない可能性が高いが、断面が方形であることから、参考資料として掲載した。全長4.6cm程度、幅0.3cm、厚さ0.3cmで、頭部形態は不明瞭だが、方形であった可能性が高い。2は上部が欠損しているため器種は不明であるが、鉄釘、もしくは穿孔具のようなものか。残存長3.85cmで断面方形である。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区の南半部において6棟検出した。各掘立柱建物跡の調査では出

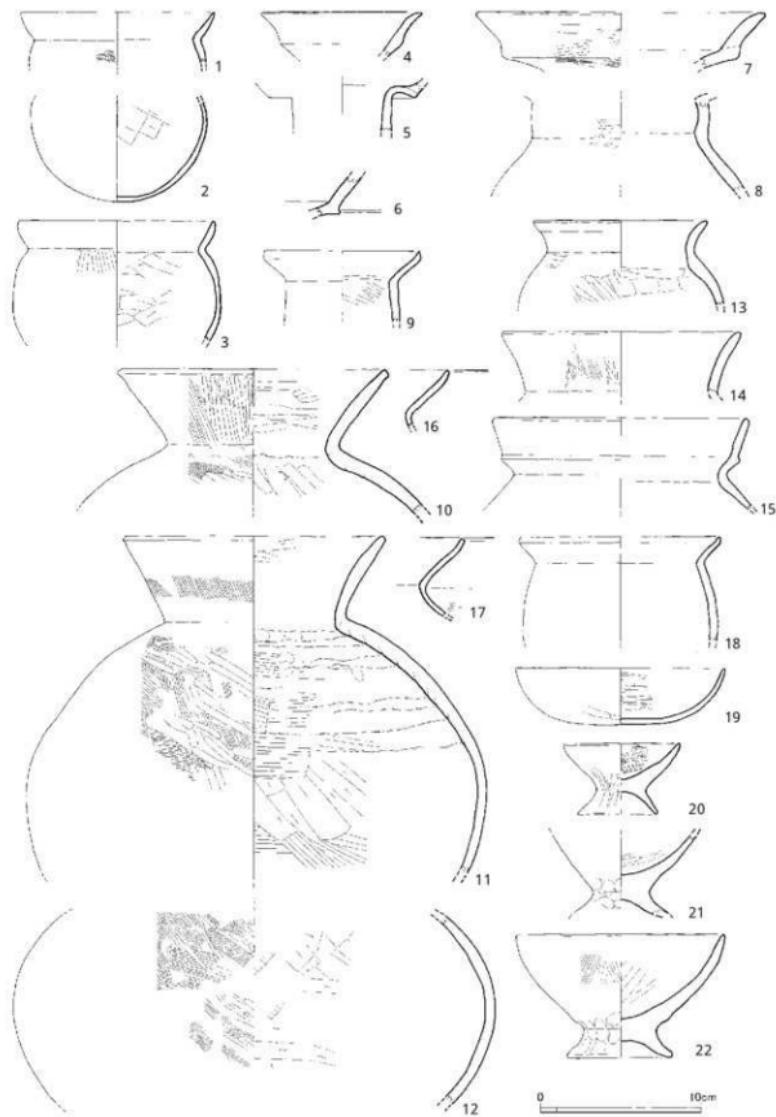


第11図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

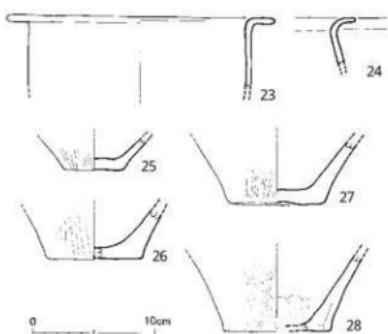
い。1・2・3・4号土坑と重複する。1号土坑より新しく、2号土坑より古いことは確認できたが、他の新古関係は把握できていない。また、2号掘立柱建物跡とも重複するが、切りあっていたと推定される柱穴が4号土坑内に位置していたため、新古関係は不明である。桁行4間以上、梁間2間で、桁行方向が5.0m以上、梁間方向が3.0mを測る。桁行方向はN-89°-Eを示す。柱掘り方は円形～楕円形を呈し、径は50～60cm前後である。最深の柱穴は遺構検出面からの深さが60cmを測る。

P3から弥生土器と須恵器が出土している。

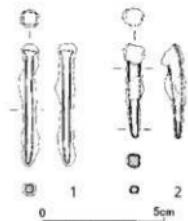
土 器 (図版14-(2)、第18図) 1は弥生時代中期の甕の底部片で、明らかに混入したものである。



第12図 4号墳穴住居跡出土土器実測図① (1 / 3)



第13図 4号竪穴住居跡出土器実測図(2)(1/4)



第14図 4号竪穴住居跡出土鉄器実測図(1/2)

2は須恵器の坏身で、受け部から体部へはほぼ直線状にのびる。立ち上がりはやや内傾して、端部は丸く仕上げられている。この坏身も遺構の年代を示す資料とは限らない。

2号掘立柱建物跡(図版7-(1)、第15図)

調査区南辺の中央付近に検出した2間×1間の建物跡で、2号土坑に切られていた。3・4号土坑、3号掘立柱建物跡とも重複しているが、新古関係は把握できていない。桁行4.2m、梁間は3.8mを測る。桁行方向はN-17°-Eを示す。東側桁行の各柱穴は若干東へずれた位置に掘り直されており、これは建替えを示すものと推定される。桁行方向は南側の調査区外へのびていた可能性もある。

出土遺物で図示できるのはP5から出土した弥生土器1点のみである。

土器(図版14-(2)、第18図) 3は弥生時代中期の甕口縁部。逆「L」字状を呈し、口縁はほぼ水平である。小片であり、混入品と考えられる。

3号掘立柱建物跡(第16図)

調査区の南部に位置する。調査区外へ続いていたため全容を把握できていない。4号土坑及び2号掘立柱建物跡と重複し、4号土坑を切っている。2号掘立柱建物跡との新古関係は確認することができなかつた。桁行4間以上、梁間3間で、6棟の掘立柱建物跡のうち最も規模が大きい。桁行方向はN-5°-Eをとり、6.7m以上、梁間は4.45mを測る。柱掘り方は円形乃至橢円形を呈し、径が40-50cm、深さは最深のもので30cmと、建物の規模からすると小さくて浅い。

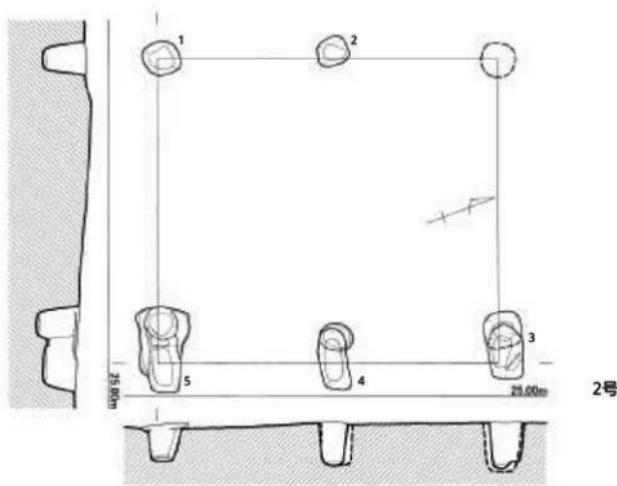
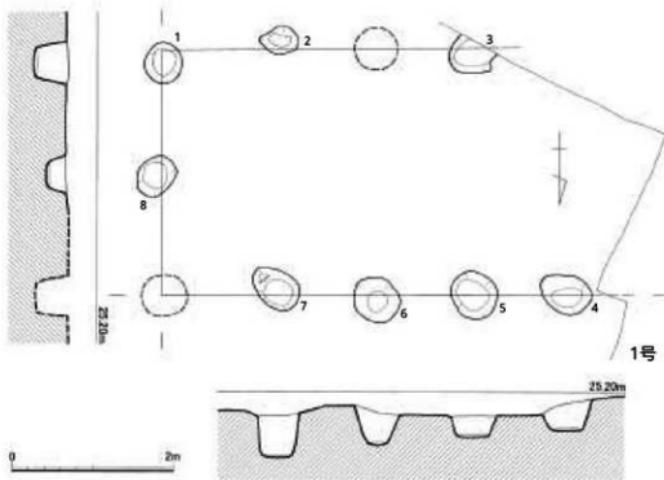
当遺構からは図示できる遺物は出土していない。

4号掘立柱建物跡(図版7-(2)、第16図)

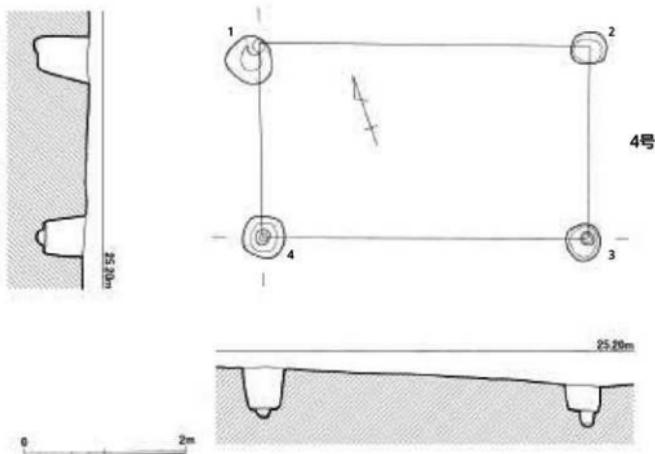
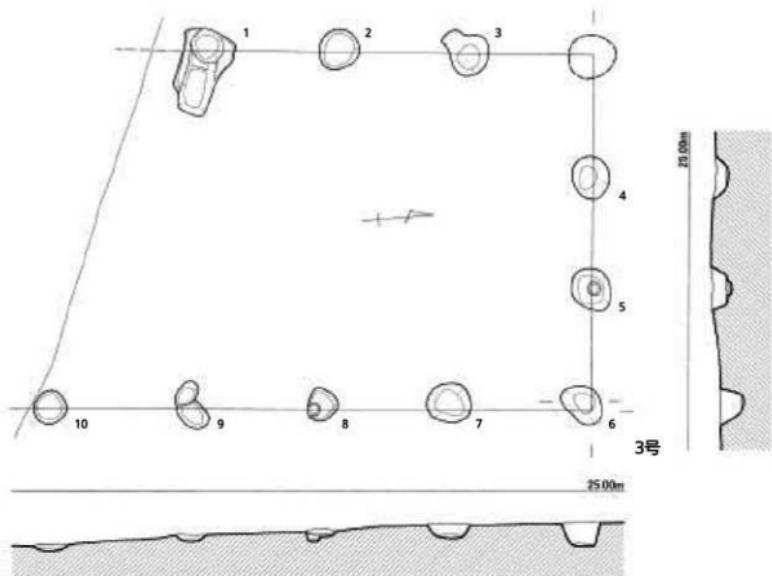
調査区中央部よりやや南寄りの位置で検出した。1間×1間の建物跡で、桁行4.1m、梁間2.4mを測る。6号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切り合いがなく、新古関係は不明である。桁行方向はN-71°-Wをとる。柱掘り方は円形に近い形状を呈し、径40-50cm前後である。最深の柱穴は65cmとやや深い。

出土遺物として図示できたのはP4から出土した弥生土器1点のみである。

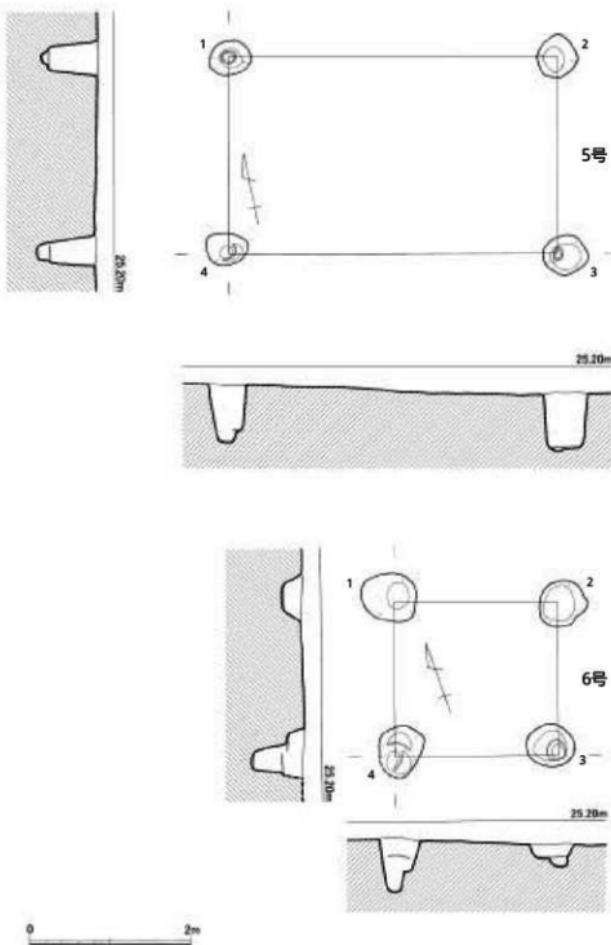
土器(図版14-(2)、第18図) 4は弥生時代中期の壺の底部であろう。小片ではあるが、底径は7.8cmに復元できる。混入の可能性が高い資料である。



第15図 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第16图 3·4号据立柱建筑物踏实测图 (1/60)



第17図 5・6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

5号掘立柱建物跡 (図版8-(1)、第17図)

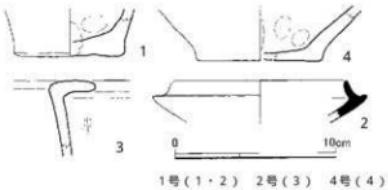
調査区の中央部に位置する。1間×1間の建物跡で、桁行4.1m、梁間2.4mを測り、近接する4号掘立柱建物跡と殆ど同規模である。桁行方向はN-79°-Wをとる。6号掘立柱建物跡と重複し、これを切っている。柱掘り方は円形～椭円形を呈し、径50cm前後を測る。深さは最深の柱穴で70cmである。

当遺構からは図示できる遺物は出土していない。

6号掘立柱建物跡（図版7-(2)、第17図）

5号掘立柱建物跡の南側に位置し、これに切られた状態で検出した。1間×1間で、桁行2.0m、梁間1.9mの小規模な建物跡である。柱掘り方は円形～楕円形を呈し、径50～70cmを測る。桁行方向はN-72°-Wである。

当遺構からは図示できる遺物は出土していない。



第18図 掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)

(3) 土 坑

1号土坑（図版8-(2)・(3)、第19図）

調査区の南西部に位置する。2.15m×1.60mの長方形プランで、竪穴住居状を呈する遺構である。現存での深さは21cmを測り、1号掘立柱建物跡に切られ、東辺は攪乱によって削平されており、遺存状態は悪い。床面には柱穴は存在しなかったが、中央部に40cm×50cmの範囲で炭化物が認められたことから、小規模な住居であった可能性がある。

遺構の中央からやや西寄りの位置に床面から10cmほど浮いた状態で、弥生中期の土器が出土した。

土 器（図版15-(1)、第20図） 1は小形の裏で、厚手のつくりである。口縁部付近は特に肥厚し、上面は水平で、外端を擒み出している。外面は粗いハケ目、内面はナデ仕上げである。2・3は逆「L」字状を呈する甕口縁部。両者とも屈曲部内面の突出はなく、口縁外端が垂下気味で、3にその特徴が顕著に認められる。4は甕の底部資料。底部内面は平らで、均一な厚さとなっている。外面はハケ目、内面はナデで仕上げられている。5の器台は厚手のつくりで、外面がハケ目、内面がナデ仕上げである。

2号土坑（図版9-(1)、第19図）

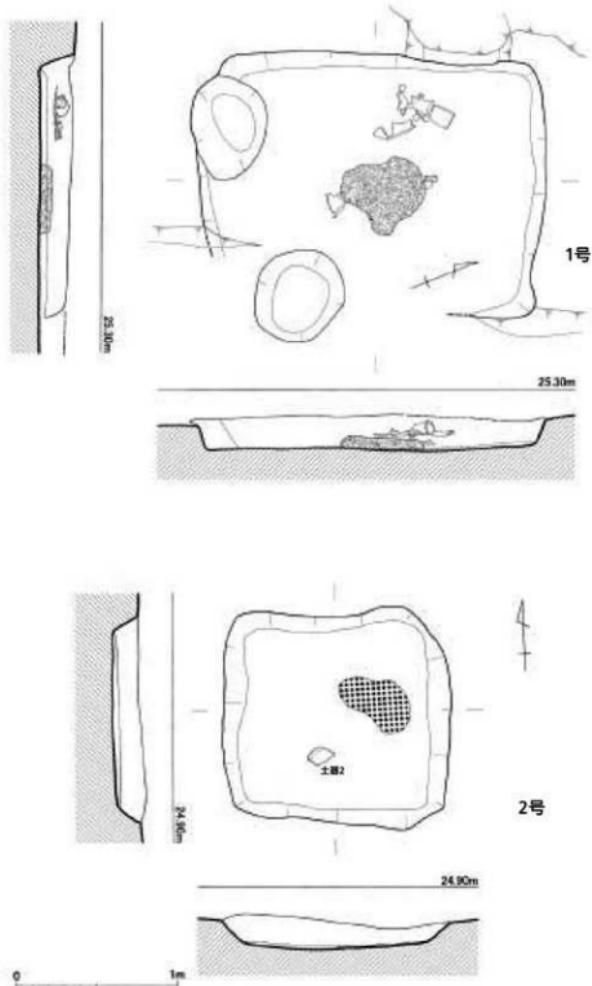
調査区の南西部に位置し、1・2号掘立柱建物跡及び3号土坑を切っている。平面形は1.41m×1.32mの方形を呈する。当遺構は3号土坑の調査中に検出したため、明確にプランを確認できた面から床面までの深さは20cm程度であったが、本来は40cm前後残存していたはずである。床面には一部焼痕が認められた。

出土遺物としては、土器及び須恵器がある。

土 器（図版15-(2)、第21図） 1は土器の甕で下半部を欠く。口縁部は外反気味に開き、胴部の最大幅は上位にある。2は須恵器の蓋。天井部中央を欠く。大形品で復元口径は23.2cmを測る。口縁部は下方へ屈曲して鳥嘴状をなす。

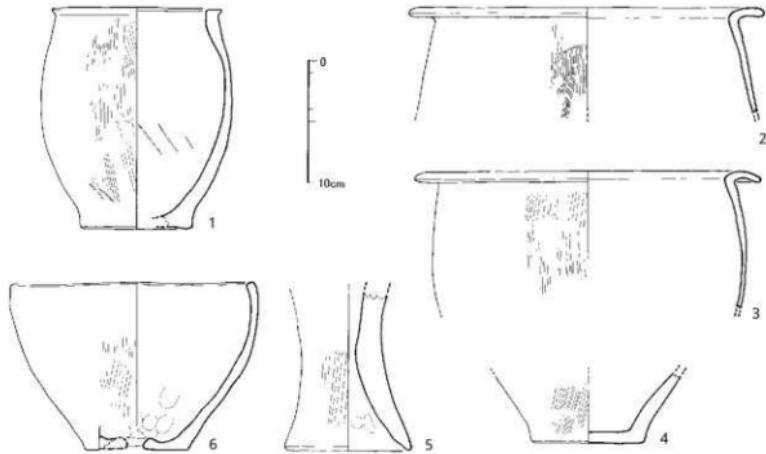
3号土坑（図版9-(1)、第22図）

調査区の南西部に位置し、2号土坑に切られている。大形の土坑で、調査区外へと続いていたため完掘できておらず全容が把握できていない。あるいは溝状となる可能性もある。検出できたのは長



第19図 1・2号土坑実測図 (1/30)

さ3.6mで、その部分における最大幅は2.95mを測る。深さは20cmで遺構の平面規模からすると浅い。当遺構から出土した遺物は少なく、土器の小片のみで図示できるものは存在しない。



第20図 1・7号土坑出土土器実測図(1/4) 1号(1-5) 7号(6)

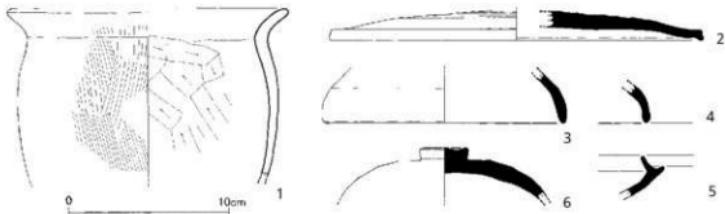
4号土坑(図版9-(2)、第22図)

3号土坑の北東側に位置する。不整規円形を呈し、長軸が3.48mを測る。南東部は幅が2.06mと広く、2箇所に段掘りが存在する。底面は平坦となっており、深さは1.23mを測る。1・2・3号掘立柱建物跡と重複しており、3号掘立柱建物跡より古い時期の遺構であることは確認できたが、この他の新古関係については明らかにできない。

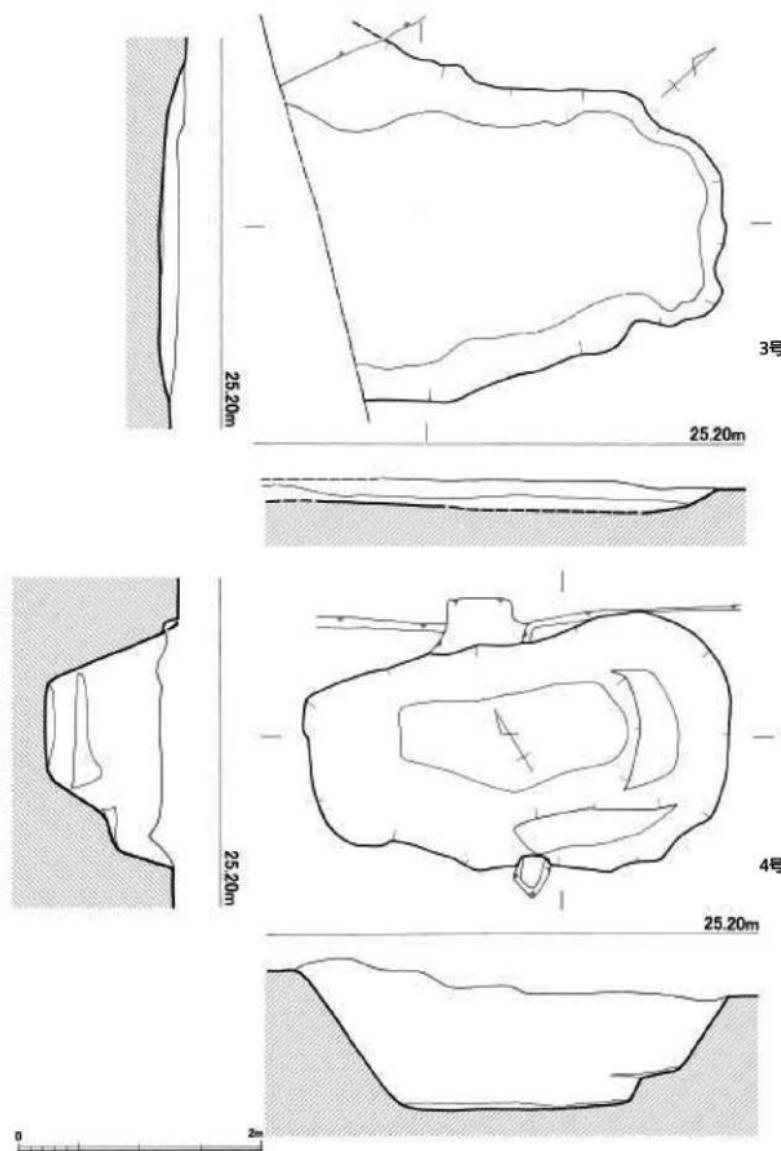
出土遺物は少なく、図示できたのは4点の須恵器と鰐羽口のみである。

土器(図版15-(2)、第21図) 3・4は壺蓋の口縁部で、口縁端部は丸く仕上げられている。5は壺身の口縁部小片。立ち上がりは内傾し、端部は丸味をもつ。6は高壺の蓋である。天井部外面は回転ヘラケズギが施され、中央に鉗状の摘みが付されている。

鰐羽口(図版16-(3)、第23図) 被熱によって青灰色～黄灰色に変色し、著しく硬化している。破片資料であるが、口径は外径が5.8cm、内径が2.4cm前後に復元できる。先端部には付着物が認められ



第21図 2・4号土坑出土土器実測図(1/3) 2号(1・2) 4号(3・6)



第22图 3·4号土坑实测图 (1/40)

る。

5号土坑（図版10-（1）、第24図）

1号竪穴住居跡と重複し、これより新しい遺構である。長さ2.18m、幅63cmの隅丸長方形を呈する。南部分は段掘りとなっており、この位置の深さは82cmを測る。

当遺構からは図示できる遺物は出土していない。

6号土坑（図版10-（2）、第24図）

調査区中央から僅かに西寄りの位置に検出した。深く掘り込まれた部分の平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸は1.26m、幅が90cmを測る。底面までの深さは85cmで、底面中央には径35cm、深さ23cmのピットが存在する。

落とし穴状遺構と推定される。

当遺構からは全く遺物が出土していない。

7号土坑（図版11-（1）・（2）、第25図）

調査区の東部に位置し、拡張を行い完掘した。平面は方形に近い形状をなし、長軸が1.68mで、幅が1.37m、深さは20cmを測る。1号土坑と形状、時期ともに共通する遺構である。

弥生時代中期の土器が出土している。

土 器（図版15-（1）、第20図） 6は遺構の北東隅床面から5cmほど浮いた状態で出土した。口径が19.9cmを測る鉢で、口縁部は僅かに内湾する。底部中央には焼成前に孔が穿たれている。外面は八ヶ目、内面はナデ仕上げである。

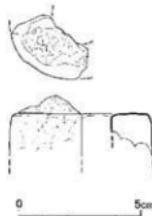
（4） ピット

調査区のほぼ全域から多数のピットを検出している。特に調査区の北部には径が20~40cm前後のピットが集中していたが、その性格及び時期については確定し得ない。一方、調査区の南部に検出したP4及びP5は、深さがともに40cm以上あり、掘立柱建物跡が集中する範囲に位置することから、掘立柱建物跡の一部である可能性が高い。

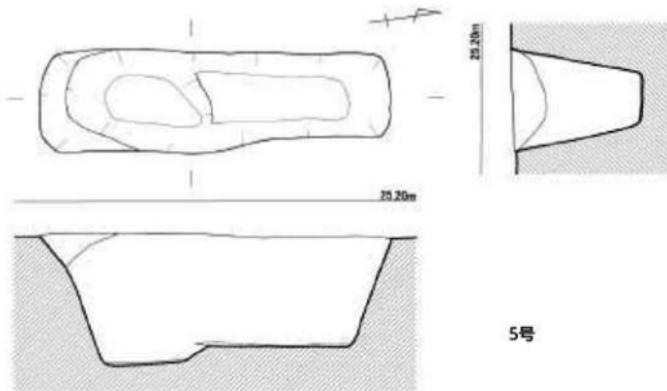
ピットから出土した遺物で図示し得るものは少なく、土器2点と石器1点のみである。

土 器（図版16-（1）、第26図） 1はP1から出土した逆「L」字状を呈する弥生時代中期後半の甕口縁部である。2はP2から出土した外来系の土師器裏である。口縁部は大きく開き、端部を僅かに摘み上げている。外面の調整は、胴部最大幅部より上が横方向のハケ目、その下位は縦方向のハケ目である。胴下部は被熱により赤変している。また、下半部を中心に煤の付着が見受けられる。

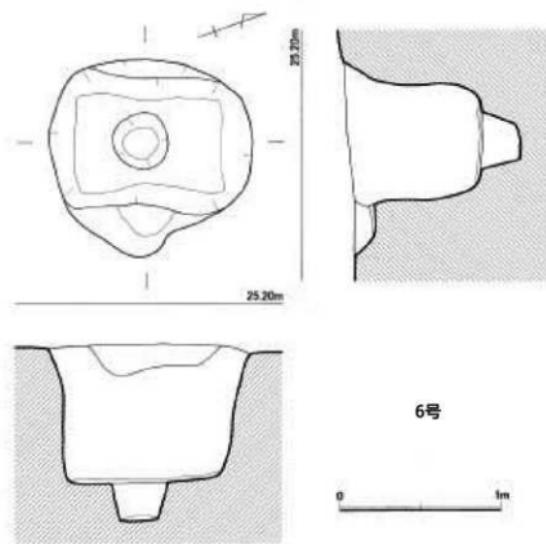
石 器（図版17-（2）、第27図） 1はP3から出土した凝灰岩製の石庖丁である。破片資料で、厚さは0.6cmを測る。孔の一部が残存している。



第23図 4号土坑出土
甕口実測図（1/2）



5号

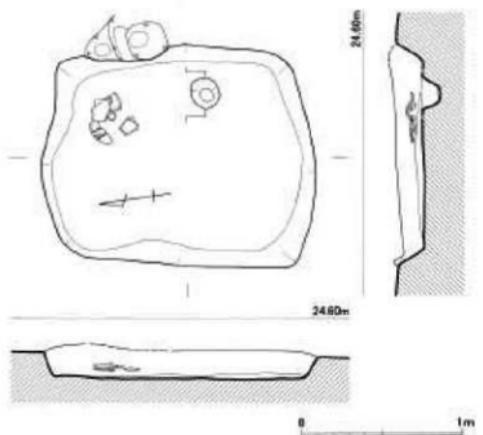


6号

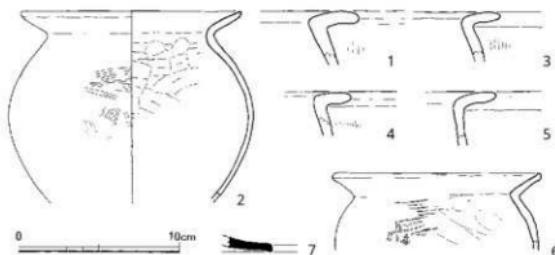
0 1m

第24图 5·6号土坑实测图 (1/30)

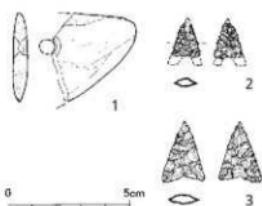
(5) 包含層



第25図 7号土坑実測図(1/30)



第26図 ピット・包含層出土土器実測図(1/3) ピット(1・2) 包含層(3-7)



第27図 ピット・包含層出土
石器実測図(1/2)

当地の地形は東側へと低くなつた緩斜面で、且つ、南北両側にも低くなつてゐたため、調査区の東・南・北端部には遺構検出面の上部に遺物を包含する薄い土層が確認された。ただ、各包含層からの出土遺物は少なく、図示できたのは土器4点と石器2点である。

土 器(図版16-(1)、第26図)

図示した土器はすべて調査区東部の包含層から出土したものである。3~5は弥生時代中期後半の逆

「L」字状をなす甕の口縁部。6は外来系の甕口縁部で、胴部と口縁部との境は稜をなす。口縁部は直線的に開き、端部は上方に摘み上げられている。外面はタタキ目、内面はヘラケズリの後ナデで仕上げられている。7は須恵器の坏蓋で、口縁部が下方へ突出する。

石 器(図版17-(2)、第27図) 2・3は調査区東部の包含層から出土した。2は黒曜石製の石鏃で、先端部及び両脚を欠く。側縁は鋸歯状をなす。3の石鏃は僅かに先端部を欠くが、ほぼ全形を留めている。漆黒色を呈する良質の黒曜石製。両側縁からの入念な剥離が施され、整った形に仕上げられている。

土器観察表

法量(の数値)は復元値

捲番号	図版番号	種別	出土位置	法量(①口徑・②器高・③底径・④胴部最大径)	残存状態	調整及び特徴	備考
5- 1	図版12	壺	1号竪穴住居跡	①(12.3)	底部欠失	調査は復元データ。内部にラグゼリ。 胎土は粗粒砂利をわずかに含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
5- 2	図版12	甕	1号竪穴住居跡	①(17.4)	口縁部1/2	調査は復元データ。内部にラグゼリ。 胎土は粗砂利をや多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
5- 3	図版12	甕	1号竪穴住居跡	①(14.2) ④(22.0)	底部欠失	調査は復元データ。内部にラグゼリ。 胎土は粗砂利を多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
5- 4	図版12	高坏	1号竪穴住居跡	①(19.1)	脚部欠失	調査は復元データ。内部にラグゼリ。 胎土は粗砂利を多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
5- 5	図版12	底部	1号竪穴住居跡	③(7.25)	底部1/2	調査は復元データ。内部にラグゼリ。 胎土は粗砂利をや多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
8- 1	図版12	甕	2号竪穴住居跡	-	口縁部小片	調査は復元データ。内部不規則。 胎土は粗砂利を多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
8- 2	図版12	壺	2号竪穴住居跡	③(12.8)	底部1/3	調査は復元データ。内部不規則。 胎土は粗砂利を多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 1	図版12	壺	3号竪穴住居跡	-	頸部付近小片	調査は不規則。胎土は細砂利を多く含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 2	図版12	甕	3号竪穴住居跡	-	口縁部小片	調査は復元データ。胎土は細砂利をわずかに含む。 焼成は良好。色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 3	図版12	甕	3号竪穴住居跡	①(16.8)	口縁部1/2	調査は復元データ。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 4	図版12	高坏	3号竪穴住居跡	①(17.65)	坏部1/3	調査は復元データ。内部不規則。口縁部ヨコナデ。 胎土は粗砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 5	図版12	高坏	3号竪穴住居跡	①(20.15)	坏部のみ	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 6	図版12	高坏	3号竪穴住居跡	脚部(8.8)	脚部1/4	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
10- 7	図版12	鉢	3号竪穴住居跡	①(8.9) ②(4.1)	完形	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
12- 1	図版13	壺	4号竪穴住居跡上層	①(12.05)	口縁部1/4	調査は復元データ。内部にラグゼリ。胎土は細砂。 焼成は良好。色調は内外表面ともに黒褐色。	
12- 2	図版13	壺	4号竪穴住居跡	④(10.9)	下半部のみ	調査は復元データ。内部にラグゼリ。胎土は細砂。 焼成は良好。色調は内外表面ともに黒褐色。	
12- 3	図版13	壺	4号竪穴住居跡上層	①(12.0) ④(12.4)	上半部1/4	調査は復元データ。内部にラグゼリ。口縁部ヨコナデ。 胎土は粗砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 4	図版13	壺	4号竪穴住居跡	①(10.0)	口縁部1/5	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 5	図版13	壺	4号竪穴住居跡上層	頸部径6.2	頸部のみ	調査は復元データ。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに黒褐色。	
12- 6	図版13	壺	4号竪穴住居跡	-	口縁部小片	調査は復元データ。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。 色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 7	図版13	壺	4号竪穴住居跡上層	①(17.95)	口縁部1/4	調査は復元データ。内部不規則。胎土は細砂利を多く含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 8	図版13	壺?	4号竪穴住居跡下層	頸部径(10.85)	頸部1/4	調査は復元データ。内部にラグゼリ。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 9	図版13	壺?	4号竪穴住居跡下層	①(9.55)	口縁部1/4	調査は復元データ。内部にラグゼリ。口縁部ヨコナデ。胎土は粗砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 10	図版13	壺	4号竪穴住居跡上層	①(16.85)	口縁・肩部	調査は復元データ。内部不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 11	図版13	壺	4号竪穴住居跡	①(16.3) ④(28.5)	口縁・胴中位	調査は復元データ。内部不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 12	図版13	壺	4号竪穴住居跡	④(29.8)	胴部のみ	調査は復元データ。内部不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 13	図版13	壺	4号竪穴住居跡	①(10.75)	口縁部1/4	調査は復元データ。内部にラグゼリ。口縁部ヨコナデ。胎土は粗砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 14	図版13	壺?	4号竪穴住居跡下層	①(14.8)	口縁部1/3	調査は復元データ。内部不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 15	図版13	甕	4号竪穴住居跡下層	①(15.9)	口縁部1/4	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 16	図版13	甕	4号竪穴住居跡上層	-	口縁部小片	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 17	図版14	甕	4号竪穴住居跡上層	-	口縁部小片	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	16と同一個体?
12- 18	図版14	甕	4号竪穴住居跡下層	①(12.45)	口縁部1/4	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は内外表面ともに淡赤褐色。	
12- 19	図版14	鉢	4号竪穴住居跡	①(13.0) ②(3.6)	全体の2/3	調査は不規則。胎土は細砂利を含む。焼成は良好。色調は粗面構造。内面は淡褐色。	

番号	図版番号	種別	出土位置	法量(①)口径②器高③底径④胴部最大径	残存状態	調整及び特徴	備考
12-20	図版14	脚付鉢	4号竪穴住居跡下層	①7.2 ②4.4 脚幅部径 4.9	全体の3/4	陶器は外側へラミカル、内面ハリ目。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色。	
12-21	図版14	脚付鉢	4号竪穴住居跡	-	口縁・裾部欠失	陶器は外側へラミカル、内面ハリ目。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色。	
12-22	図版14	脚付鉢	4号竪穴住居跡	①(12.9) ②7.6 脚幅部径 6.55	全体の2/3	陶器は外側へラミカルナデ目。内面ハリ目。 焼成はやや良好。色調は外側濃褐色、内面暗褐色。	
13-23	図版14	甕	4号竪穴住居跡上層	①(22.0)	口縁部 1/8	陶器は外側へラミカル、内面ハリ目。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色。	
13-24	図版14	甕	4号竪穴住居跡上層	-	口縁部小片	陶器は外側へラミカル、内面ナデ。胎土は綈砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色。	
13-25	図版14	底部	4号竪穴住居跡上層	③4.8	底部のみ	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色。	
13-26	図版14	底部	4号竪穴住居跡上層	③(7.8)	底部 1/3	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
13-27	図版14	底部	4号竪穴住居跡下層	③(7.9)	底部 1/2	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
13-28	図版14	底部	4号竪穴住居跡上層	③(8.8)	底部 1/3	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
18-1	図版14	底部	1号竪立柱建物跡	③(6.9)	底部 1/2	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
18-2	-	环身	1号竪立柱建物跡	①(10.6) 受部径(13.25)	口縁部 1/4	陶器は外側へラミカル、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに灰。	
18-3	図版14	甕	2号竪立柱建物跡	-	口縁部小片	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
18-4	図版14	底部	4号竪立柱建物跡	③(7.8)	底部 1/3	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
20-1	図版15	甕	1号土坑	①(14.0) ②(18.2) ③(9.2) ④(15.6)	全体の1/2	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
20-2	図版15	甕	1号土坑	①(29.0)	口縁部 1/3	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 焼成はやや良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
20-3	図版15	甕	1号土坑	①(28.4)	口縁部完存	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
20-4	図版15	底部	1号土坑	③(9.4)	底部 1/2	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
20-5	図版15	器台	1号土坑	裾部径 10.4	下半部	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色、淡褐色。	
20-6	図版15	鉢	7号土坑	①(19.9) ②(13.7) ③(8.5)	ほぼ完形	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	底部に焼成前穿孔あり
21-1	図版15	甕	2号土坑	①(17.5)	上半部 1/3	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 胎土は綈砂粒を含む。焼成は良好。	
21-2	図版15	蓋	2号土坑	①(23.2)	口縁部 1/3	陶器は外側部表面直線へタケズリ、内面不定方向のナデ。 口縁部ヨコナデ。胎土は綈砂粒を含む。	
21-3	図版15	环蓋	4号土坑	①(15.0)	口縁部 1/3	陶器は外側ともヨコナデ。胎土は焼成。	
21-4	図版15	环蓋	4号土坑	-	口縁部小片	陶器は外側ともヨコナデ。胎土は焼成。	
21-5	図版15	环身	4号土坑	-	口縁部小片	陶器は外側ともヨコナデ。胎土は焼成。	
21-6	図版15	高环蓋	4号土坑	つまみ径 3.05	天井部のみ	陶器は外側面へタケズリ、内面不定方向ナデ。 胎土は綈砂粒を含む。	
26-1	図版16	甕	ピット1	-	口縁部小片	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は外側濃褐色、内面淡黃褐色。	
26-2	図版16	甕	ピット2	①(13.8) ④(15.2)	底部欠失	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 胎土は綈砂粒を含む。	外側スス付着
26-3	図版16	甕	包含層	-	口縁部小片	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 胎土は綈砂粒を含む。	
26-4	図版16	甕	包含層	-	口縁部小片	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 胎土は綈砂粒を含む。	
26-5	図版16	甕	包含層	-	口縁部小片	陶器は外側ハリ目、内面ナデ。胎土は綈砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡黄褐色。	
26-6	図版16	甕	包含層	①(13.0)	口縁部 1/3	陶器は外側ナデ目、内面ハリ目。	
26-7	図版16	坏蓋	包含層	-	口縁部小片	陶器は外側面へタケズリ、内面ナデ。胎土は綈砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡黄褐色。	

IV ま と め

当遺跡は春日丘陵の西側に並走する台地上に立地しており、本報告の発掘調査地点は、台地の東斜面に当たる。遺跡の範囲は市域を越えて福岡市側へと続いており、その主体は福岡市域に含まれる台地の尾根部であろう。福岡市の遺跡分布図によると、当遺跡の名称は弥永原遺跡群とされ、ガラス勾玉鋲型や内行花文鏡が出土したことで周知されている遺跡である。ガラス勾玉鋲型出土地点は、本発掘調査地点の北西約400mに位置し、弥生時代後期の環濠や竪穴住居跡等が確認されている¹⁾。多数の石蓋土坑墓や箱式石棺墓が発見され、内行花文鏡が出土した地点²⁾は、本発掘調査地点の北方約300mに当たる。また、平成14年度に福岡市教育委員会によって発掘調査された弥永原遺跡第6次調査地点³⁾は、本調査地点の北方約100mに位置し、櫛棺墓19基、土坑墓17基、石蓋土坑墓2基、石棺墓2基等、弥生時代中～後期の埋葬遺構群が検出されていて、本調査地点との強い関連が想定される。

試掘調査及び発掘調査において、当該地より東側は遺構が殆ど存在しないことを確認しており、この地点が遺跡の東端と判断される。今回の発掘調査の結果からすると、調査区内には弥生時代前期から8世紀までの生活遺構が存在する。この間、集落自体が継続的に営まれたのか、断続的であったのかについては、調査範囲が限られていたため確定できない。調査区内では、弥生時代の中期初頭～中頃及び後期、5世紀後半～6世紀中頃等の遺物は確認できていない。

発掘調査で検出した各遺構の時期について出土土器から見ていくと、2号竪穴住居跡が弥生時代前期、1号土坑及び7号土坑が弥生時代中期後半～末に位置づけられる。1・3・4号竪穴住居跡は古墳時代前～中期の遺構で、4号は久住編年⁴⁾のII A～II B期に比定される。1・3号はこれより時期的に新しく、5世紀初頭前後と推定される。また、4号土坑は6世紀末～7世紀前半、2号土坑は8世紀前半の年代が考えられる。

ここで検出した6棟の掘立柱建物跡は、いずれも時期を確定できないが、調査区の南西部に集中する状況からすると、比較的近接した時期の所産とも考えられる。その時期については、切り合いによる新古関係からすると、古墳時代後期以降の可能性が高いように思われる。

註1 福岡県教育委員会 1965『福岡県弥永原遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書第32集

福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会 1967『福岡市弥永原遺跡調査概要』

2 鏡山 猛 1959「環溝住居跡小論」(四)『史蹟』第78集

3 福岡市教育委員会 2004『弥永原遺跡』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集

4 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX

図 版



川久保B遺跡周辺航空写真（南東から）



川久保B遺跡周辺航空写真（北西から）



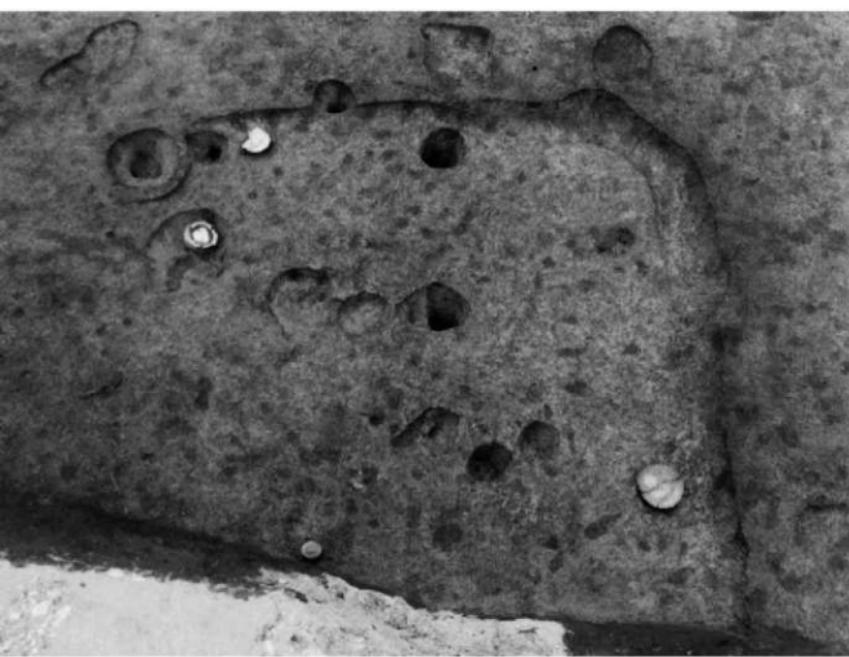
(1) 川久保B遺跡全景(東から)



(2) 1号竪穴住居跡(西から)



(1) 2号竪穴住居跡(東から)



(2) 3号竪穴住居跡(北から)



(1) 4号竪穴住居跡（北から）



(2) 4号竪穴住居跡（東から）



(1)



(2)



(3)



(4)

4号竪穴住居跡土器出土状態

- (1) 土器12
 - (2) 土器19
 - (3) 土器22
 - (4) 土器2
- (土器番号は第12図と対応)



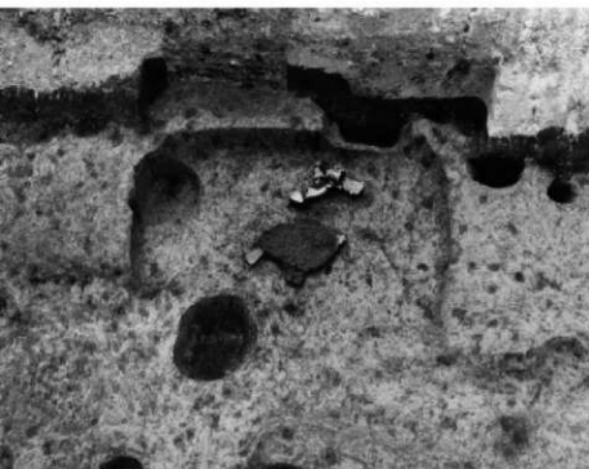
(1) 1・2号掘立柱建物跡(西から)



(2) 4・6号掘立柱建物跡(北から)



(1) 5号掘立柱建物跡（北から）



(2) 1号土坑（東から）



(3) 1号土坑土器出土状態



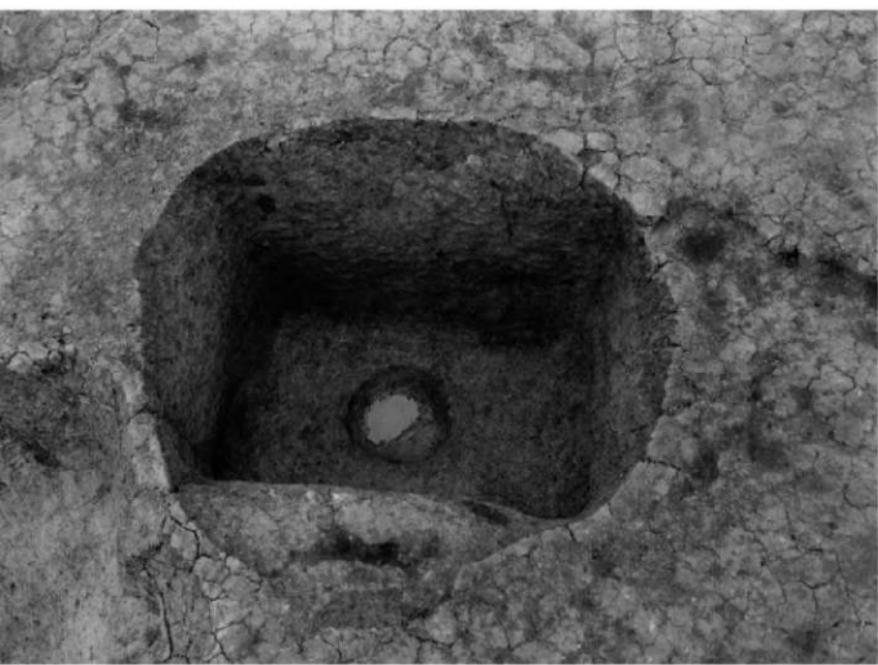
(1) 2・3号土坑(東から)



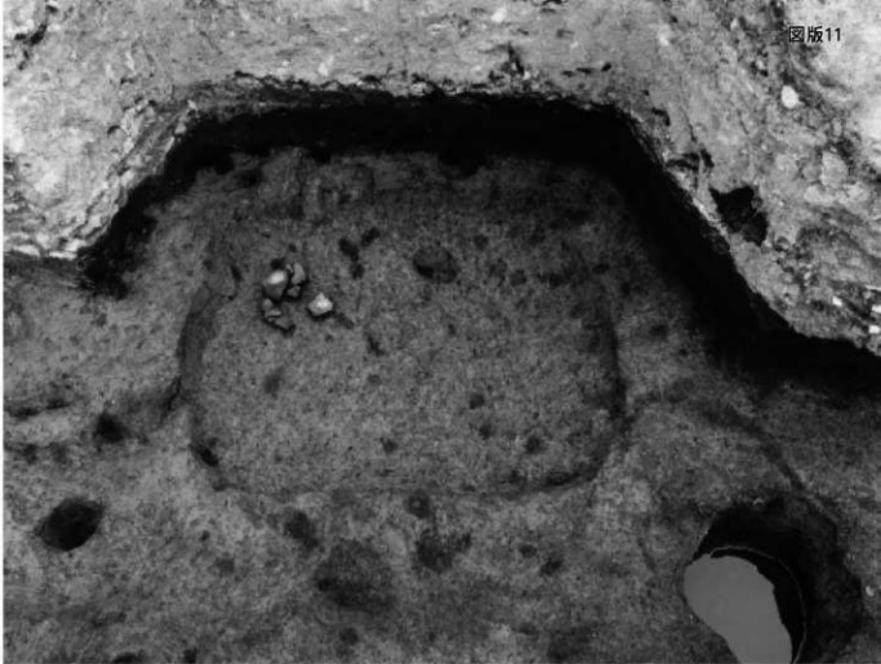
(2) 4号土坑(南から)



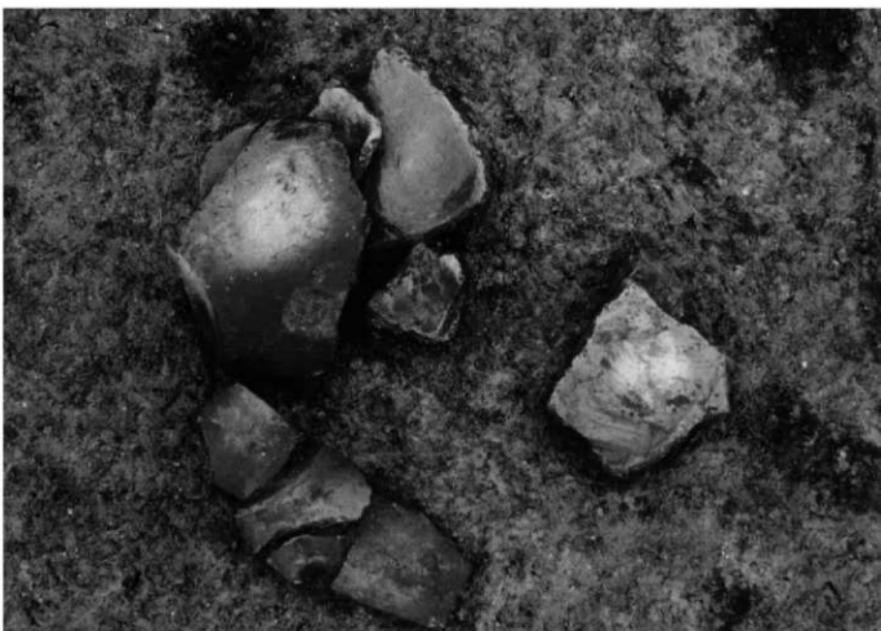
(1) 5号土坑(東から)



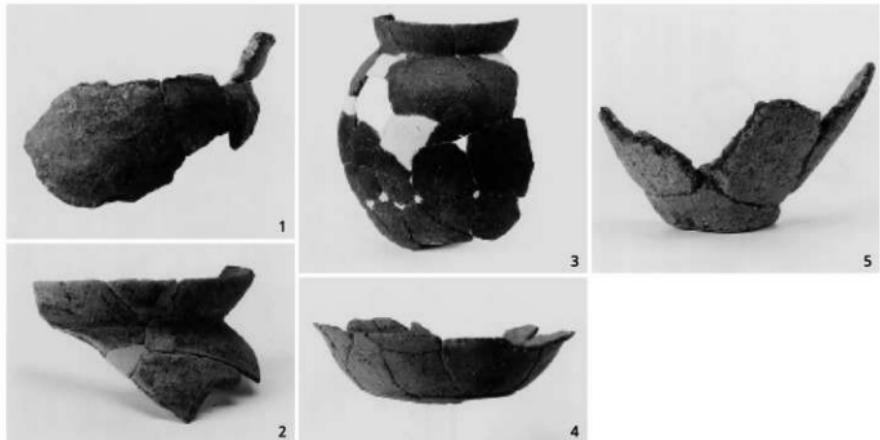
(2) 6号土坑(東から)



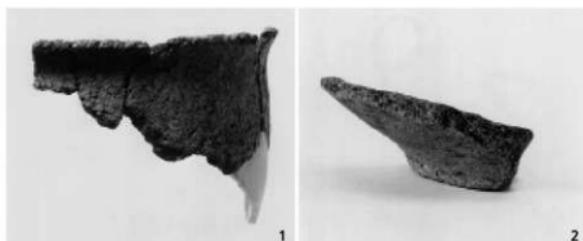
(1) 7号土坑(西から)



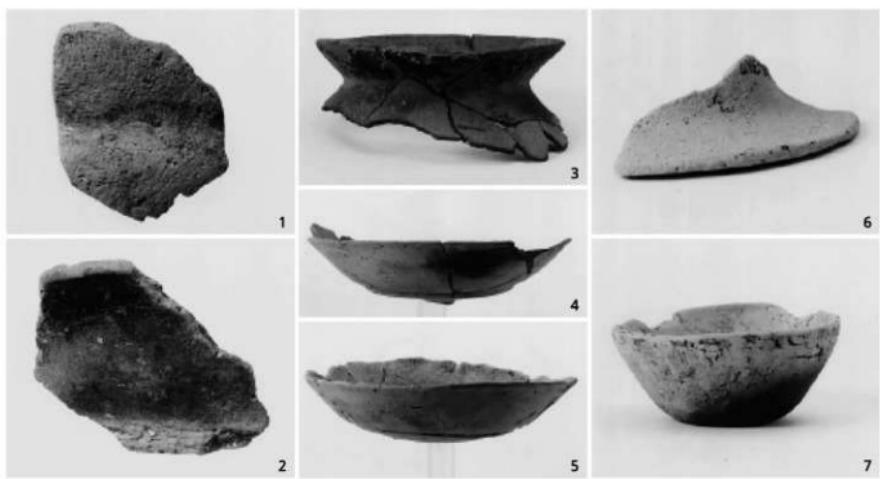
(2) 7号土坑土器出土状態



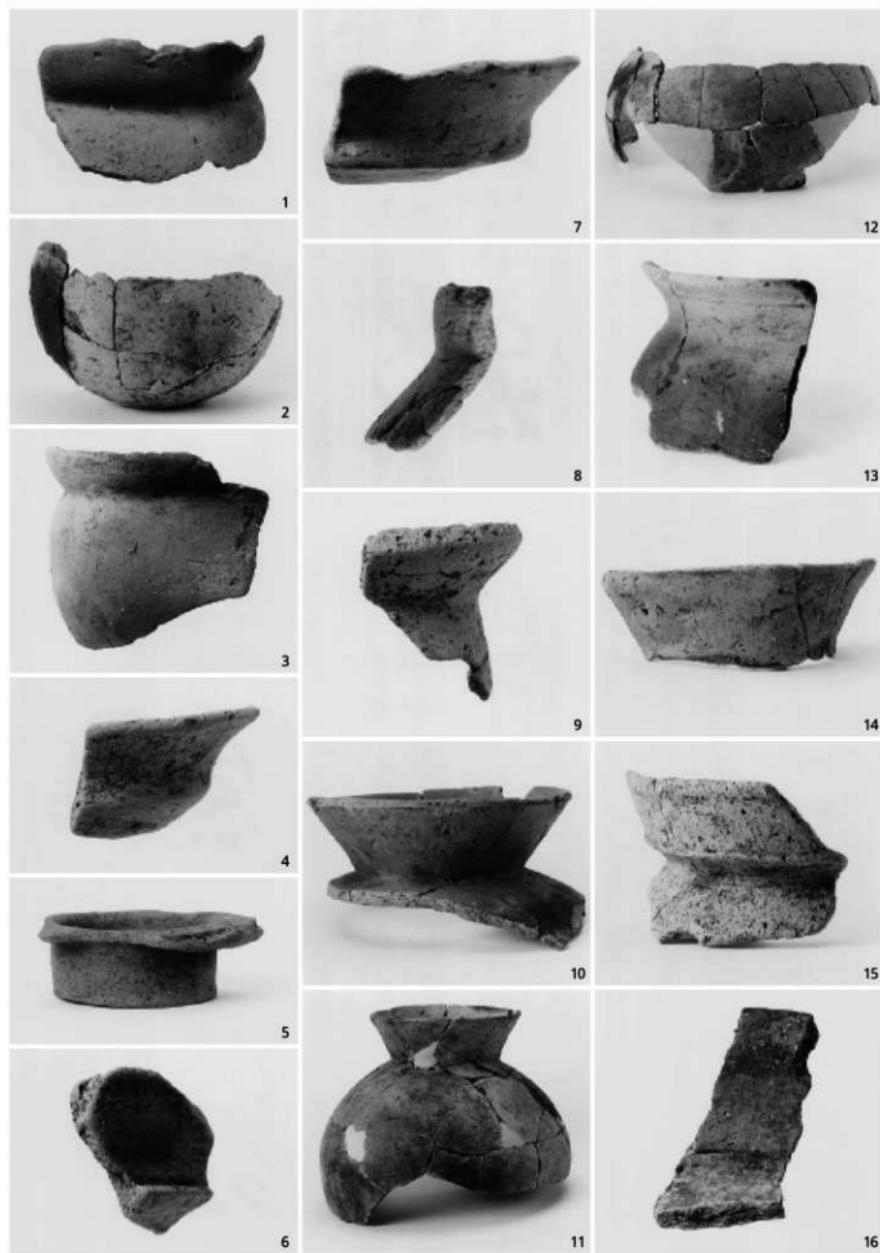
(1) 1号竖穴住居跡出土土器



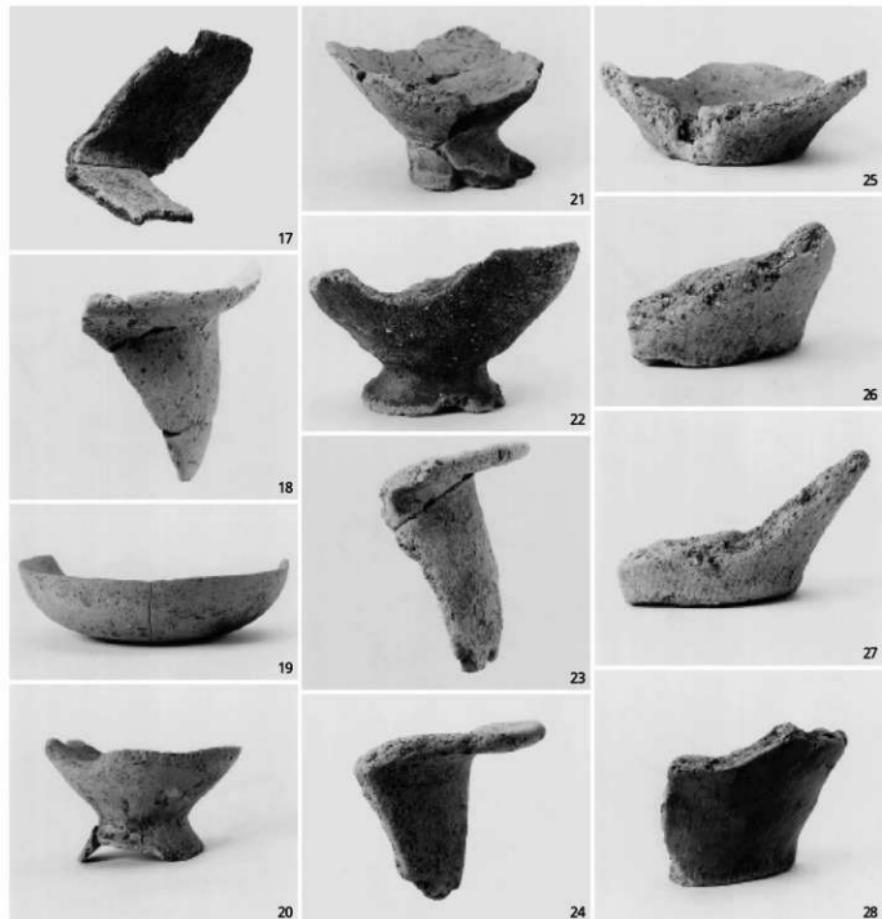
(2) 2号竖穴住居跡出土土器



(3) 3号竖穴住居跡出土土器



4号竪穴住居跡出土土器①



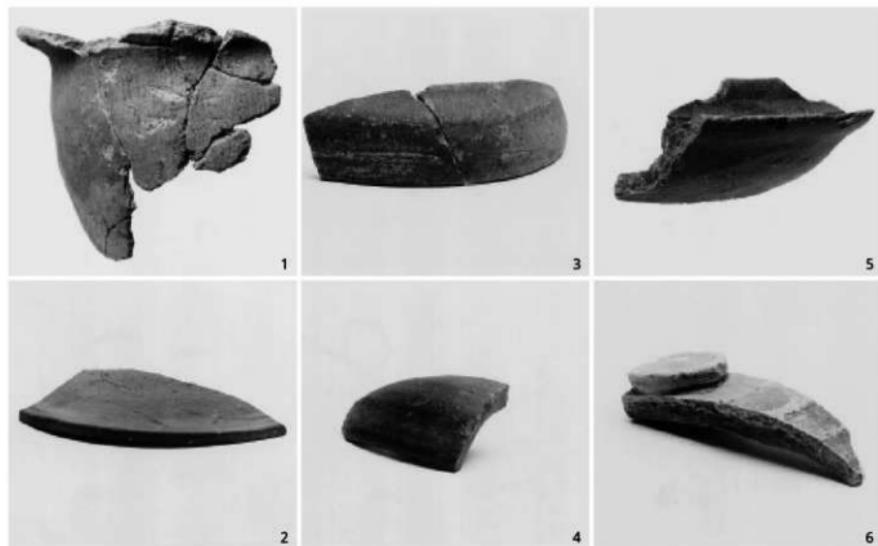
(1) 4号竖穴住居跡出土土器②



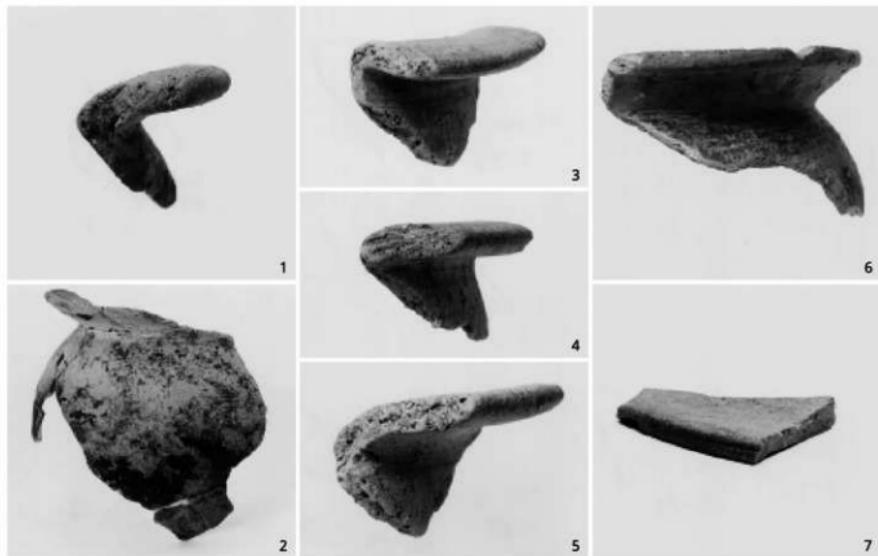
(2) 挖立柱建物跡出土土器 1号(1) 2号(3) 4号(4)



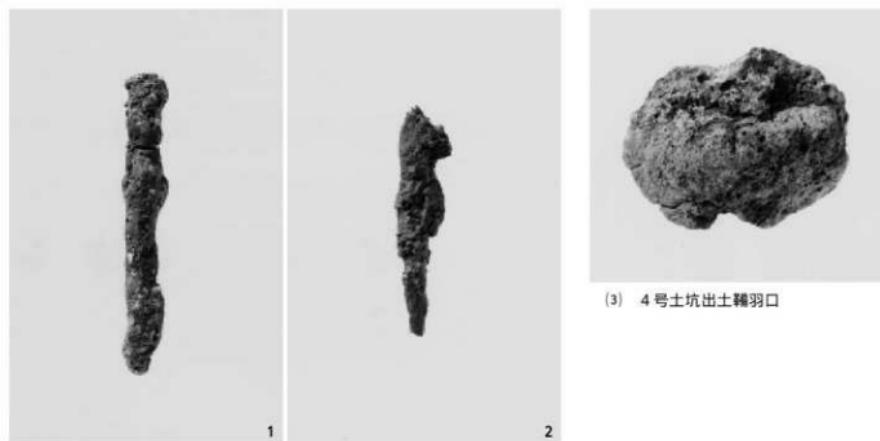
(1) 1・7号土坑出土土器 1號(1~5) 7號(6)



(2) 2・4号土坑出土土器 2號(1~2) 4號(3~6)



(1) ピット・包含層出土土器 ピット(1・2) 包含層(3~7)



(2) 4号竪穴住居跡出土鉄器

(3) 4号土坑出土鰐羽口



(1) 1・4号竪穴住居跡出土石器



(2) ピット・包含層出土石器

報告書抄録

川久保 B 遺跡

春日市文化財調査報告書

第59集

平成23年 3月31日

発 行 春日市教育委員会

福岡県春日市原町 3丁目 1番地 5

印 刷 株式会社 昭和堂 九州支店

福岡県福岡市博多区東比恵 4- 2- 10